



# 児童の豊かな表現力 の育成を目指して

## ～主体性をいかした実践を通して～

なぎさ公園小学校  
教諭 中谷 綾

### 表現力の育成の重要性

本校では、「グローバル社会に生きる学び合う力の育成」という研究主題に基づき、各教科で取り組みを行っている。その中で、子どもが主体的に学び、自らの力を発揮できるよう、児童主体型の授業に取り組んでいる最中である。

小学校学習指導要領国語編の教科の目標に、「言葉を適切に表現し正確に理解する能力を育成し、伝え合う力を高めるとともに、思考力や想像力及び言語感覚を養い、国語に対する関心を深め国語を尊重する態度を育てる」とある。これからの学校教育において、主体的な学びによる思考力・判断力と共に表現力の育成が重要だと考えた。

そこで、表現力の育成を目指した国語科の実践について述べる。

### ①読書会～深く読み味わう

5年生の国語の授業で、「リテラチャー・サークル」の手法を用いた読書会を行った。「リテラチャー・サークル」とは、少人数のグループを組み、グループ内で同じ物語の同じ部分を違った焦点の当て方で読んで話し合う読書法である。

各グループには、「コネクター(自分との繋がりを見つける)」「クエスチョナー(疑問を見つける)」「リテラリー・ミナリー(優れた表現に着目する)」「イラストレーター(心に浮かんだ情景などを絵や図で表す)」という4つの役割を置く。それぞれの役割を果たしながら本を熟読し、その後、グループ内

で役割に応じた話し合いをする。

教材は、「ある犬のおはなし」「100万回生きたねこ」「大きな木」「葉っぱのフレディ」の4冊とし、いずれも「命」をテーマにした絵本を取り上げた。

まず、文章を正確にじっくり読むことと挿絵に引っ張られないようにすることを重視し、敢えて挿絵のない本文だけ印刷したものを渡して学習を始めた。

徐々に学習を進める中でじっくり読みこむことができるようになっていった。「まとめシート」を見ると、初めは「犬は寂しかった」とだけあったものが、交流を通して「恐怖・不安・パニック・悲しみ」など、その時の状況を表す言葉が次第に増えていく様子があった。最終的には、「寂しさや不安、恐怖があったが、死の直前まで飼い主を無条件に信じて待ち続けた。そして、決して、飼い主のことを恨んではいない」というまとめにたどり着くことができた。



学習後の感想には、「深く読むと、これまで見えなかったものが見えてきて面白くなった」「そこにある言葉や表現の意味を考えるようになった」「友だちのアドバイスで、よりの確かな言葉を見

つけることができた」「みんなに自分の考えが伝わるよう言葉を選ぶようになった」などの記述が目立った。

児童の中には、「本は、じっくり読むと楽しい」と話したり、「リテラチャー・サークルを使って、他の本も読んでみたい」「どの班も同じ本を読んで、グループで討論してみたい」と提案したりするなど、大きな収穫があった。

### ②朗読劇～主体的な練習過程の工夫

朗読劇であるリーダーシアターは、主体的な学びと表現力や自己肯定感の育成に非常に有効だと感じている。また、「これからの時代に求められる国語力を身につける方策について」(文部科学省)の中で、演劇などを取り入れた授業を推奨しているように、演じる活動を通して、「聞く」「話す」「読む」「書く」の全てを有機的に繋げることが可能となる学習である。

リーダーシアターは、衣装や小道具、身振りなどは最小限にするという特徴がある。演劇ならば、小道具や身振りで表現を補うことができるが、朗読劇ではそれができない。子どもにとっては難しさがあるため、まず、台本をきちんと読みこみ、書いてある言葉から心情や情景をしっかりと理解し、それを音声言語で観る人に伝わるよう表現(抑揚、強弱、読み方、間合いなど)の工夫をしていかなければならない。

主体的に学ぶための工夫として、原作をリーダーシアター用にアレンジした作品に取り組んでみた。練習は、子どもたちがお互いの読みを聞き合いながら修正を重ね、「読み(語り)」だけ

で劇が成立する状態にした上で、最後に朗読をより引き立てるための動きや演出について、子どもたちが工夫を出し合って決めるという手順を進めていった。練習を重ねるごとに、助言が具体的になり、良い表現があった時には自然に拍手が起き、演じる方もその反応を体感することで、さらに良いものにしていくと意欲的に表現するようになっていった。発言があまり得意でない児童が、まるで役者のような巧みな表現で発表し、周りの児童から絶賛される場面にもたくさん出会った。

自分たちの工夫を取り入れることで、次第により良くなっていくことを体感すると、子どもたちの話し合いや練習に熱が入っていった。

なぎさ祭で披露する本番では、上演時間約25分という長い作品であったにも関わらず、多くの観客が笑ったり涙ぐんだりしていただき、大成功であった。子どもたちも、何もないところから作り上げて成功を取めたことに、目を輝かせて大きな達成感を感じていた。

次の年、5年生に進級して、完全オリジナルの作品に挑戦した。「戦争」をテーマにした作品だったため、子どもたちの反応を心配したが、それは杞憂だった。4年生の時に成功体験をしていることが、子どもたちの大きな自信になっていたのである。子どもたちは「平和を伝える大使になる」との使命感を

もって作品に臨んだ。自ら練習計画を立て、言葉の細かなところまで着目し、次から次へと工夫を出し合いながら、自分たちで自分たちの考える完成形を目指して進んでいった。

もちろん、本番は子どもたちのねらい通り大成功。観てくださった方が感動の涙を流していただき、「再演希望」というお声までいただき、また1つ貴重な成功体験を重ねることができた。演じながら客席を見る余裕のあった児童も半数くらいいたようだ。それは、なんと遅く嬉しい成長の姿であっただろうか。私にとっても、忘れられない感動的な出来事の1つになっている。

### ③名画の解説文 ～対話を通じた表現の工夫

6年生では、主要な単元で対話を取り入れた授業に取り組んだ。

「この絵、私はこう見る」という4つの名画の中から自分の選んだ絵の解説文を書く学習では、敢えて違う絵を選んだ者同士でグループを組み、自分の解説文の骨子を説明させる機会を設けた。必然的に自分の考えを伝えなければならなく

なるので、子どもたちは言葉を吟味しながら説明していた。また、聞き手も普段よりしっかり聞き、質問や助言をする姿が見られた。

学習後のふり返りでは、話すことに苦手意識をもっている児童も、「人に説明することは、自分の勉強にもなる」とわかった。「自分のアドバイスが人の解説文のヒントになったことが嬉しかった」「うまく言えなくても、伝えることが大事だと気付いた」などと記述していた。対話的学習が表現力の育成に一定の効果があったと考えられる。

実践を通して、言葉による表現力の向上は、学習意欲や自己肯定感の向上にも繋がることを痛感した。今後も、子どもたちが言葉を磨き、自信をもって言葉で自分の考えを伝えることができるような実践を重ねていきたいと思う。

